

## A 経済学・経済政策

### 【総評】

令和6年度の本試験は、経済学・経済政策25問（昨年25問）のうち、マクロ経済学が13問（昨年14問）、ミクロ経済学が12問（昨年11問）であり、例年通りの出題構成となりました。

また、5肢択一の問題は、マクロ経済学が10問（昨年13問）、ミクロ経済学が11問（昨年10問）であり、やや少なくなりました。

しかし、正誤の組み合わせ問題は、マクロ経済学が5問（昨年4問）、ミクロ経済学が6問（昨年7問）出題されており、こちらは例年通りとなりました。

### ・当年の難易度

マクロ経済学、ミクロ経済学ともより理解力を問う問題が多くなったことから、全体としては、昨年度と比べて、やや難しいレベルの難易度になったと思われます。

合格点を確保するには、例年同様に、基本的な知識で解くことが可能な問題を取りこぼさないように確実に解答し、新しい問題については、問題文や選択肢の記述から判断できる問題をいかに得点するかがポイントとなりました。

### ・新傾向や特筆すべき出題内容

（マクロ経済学）

マクロ経済学では、比較的出題頻度が高い国民経済計算と生産物市場均衡が例年同様出題されました。このため、特に第4問（国民経済計算）や第7問（生産物市場均衡）は確実に得点したい問題です。また、第5問（消費関数）、第8問（ビルトイン・スタビライザー）、第9問（為替レート）、第10問（マンデル・フレミングモデル）も得点しておきたい問題でした。

なお、第11問（IS-LM曲線）は、特に難しい問題でしたので、時間内にできるだけ多く解答するためには、優先度を下げるという考え方もできたでしょう。

（ミクロ経済学）

ミクロ経済学では、比較的出題頻度が高い独占市場と公共財が例年同様出題されました。このため、第17問（独占市場）や第19問（公共財）は確実に得点したい問題です。また、第13問（需要の価格弾力性）、第14問（予算制約線）、第15問（等費用線と等産出量曲線）、第16問（費用曲線）の（設問2）、第20問（労働市場の余剰分析）の（設問2）も得点しておきたい問題です。

### [的中！合格模試]

マクロ経済学の第10問（マンデル・フレミングモデル）とミクロ経済学の第19問（公共財）は、合格模試で出題された論点でした。STUDYing受講生においては確実に得点しておきたい問題です。

以上